

VII 総括

ここでは、調査の成果と今後に残された問題について触れ、調査の総括とする。

1 都市・安濃津の背景

第Ⅱ章でも触れたように、伊勢湾西岸部には数多くの港がある。その点からすれば、安濃津が特別に重要な港である必要はない。港が物流のための拠点であることは言うまでもないが、地域の物資を流通するためのみであれば特に大きな港が形成される必要性はないのである。

これは安濃津についても言える。ここが安濃郡内の物資を流通させるためのみの港であれば、安濃津がことさら表立つ必要もない。にもかかわらず安濃津が注目されるのは、それ相応の意義があるとみるべきである。たとえ近世以降の史料を基礎にしているにしても、である。

中世後期の安濃津は、「この國のうちの一都會にて、封疆もひろく、家のかすもおほくて、いとみところあ」った場なのである。⁽¹⁾このことから安濃津は、港を中心としてできた伊勢地域屈指の都市だったと見ることができる。

では、なぜ安濃津は都市たり得たのか、あるいは数多ある港の中でも中心的な位置を占めるのであるか。

ひとつの理由として、領主権力が関与していた港である、という説明が挙げられる。事実、安濃津は中世を通じて神宮領であり、中世後期には室町期守護や国人領主なども積極的に関与しようとする場である。

また、中世後期には、大湊に見られたような惣郷的な結合が見られた点も重要である。都市を成立させる媒体としてのある種の共同体がいかに重要な点については、豊田武氏以来幅広い検討が加えられている。⁽²⁾

このような、領主権力が複雑に関与する場であること、あるいは、都市共同体が形成されていたことなどをもって、安濃津は都市たり得たという評価は極めて妥当である。しかし、これらは中世安濃津が

たどり着いた一定の成果を示すもの、ないしは、成果に依拠したものであることを物語るものなのであり、なぜ都市たり得たのか、という問に対する説明にはならない。

事の淵源は、中世以前に遡ると見るべきであろう。第Ⅱ章で触れたように、弥生時代・古墳時代に見られた文化伝播は、海路によるものと考えることによってより膨らみを増す。その要の位置に安濃津が存在していることは看過できない事実である。安濃津の淵源を有史以前にまで遡ることによって、安濃津の実質的な評価が可能となろう。

このような淵源を持つ安濃津の、中世以降の展開を物語るものとして、次の史料を注目したい。⁽³⁾

<史料1>

太神宮神主帖 諸國往反津泊預

欲被任先例、無事煩令往反、當宮御領安濃津御厨刀櫛中臣國行等状、

右、得彼國行解状爾、當宮御領神人等、依無指寄作田畠、往反諸國成交易之計、致供祭之勤、成世途之支者、承前之例也、因之、往反渡海之間、自往雖無事煩、近年以降、背先例致其妨之條、大愁也、然則任先跡無事煩、欲彼令往反渡海之状、帖送如件、神威無止、先跡有限、何無寛優哉、以帖、

⁽¹¹⁹⁶⁾ 建久七年四月十五日 大内人荒木田

祢宜荒木田神主在判

これまでに何度か触ってきた、伊勢神宮による「往反諸國成交易之計」が保障されている史料である。この「往反諸國」の文言は、伊勢では比較的史料の残っている大湊にも見られない。また、廻船鑄物師が「諸國七道往反」していたことは確認できるものの、日本列島にある数多の港町中にも、この

ような文言はほとんど見られない。この「往反諸国」の文言こそ、安濃津の重要な部分を言い当てていると考える。第VI章2で触れた物流拠点としての安濃津も、この「往反諸国」の結節点であるからこそ発生するものと考えるのである。

このように考えれば、中世において領主権力が積極的に関与したくなるような安濃津とは、中世における領主権力によって形成されたような代物ではなく、それ以前の長い歴史のなかで培われてきた場であると見ることができよう。

そして、広域に展開する物流の結節点という視点から見れば、安濃津をとりまく海運・海路の考察にあたっては、日本列島に限った視野ではもはや不可能とさえいえよう。すなわち、日本列島はまぎれもなく東アジアという大地域の1小地域なのであり、日本史とはアジア世界から決して遊離して考察されるべき問題ではないのである。都市・安濃津をとりまく環境は、まさに国際的なものなのである。

2 残された課題

つぎに、今回の調査によって明確となった、安濃津遺跡群が提起する問題点を掲げておきたい。

a 安濃津遺跡群の初現

まず、安濃津遺跡群の初現である。今回の調査区からは、古墳時代前期の遺構・遺物が見つかり、当地での人間活動がこの時期にまで遡るのは確実である。また、包含層中から出土した遺物には、弥生時代の石鏃や土器もあり、遺跡の形成が弥生以前にまで及ぶ可能性は充分ある。弥生時代以前における安濃津の歴史的機能を考古学的に検討する点からも、古墳時代以前の状況は非常に興味深く、今後の調査成果が期待される。

b 古代の安濃津

安濃津が信頼できる文献にはじめて登場するのは、次の『中右記』永長元(1096)年12月9日条である。

＜史料2＞

後聞、伊勢国阿乃津民戸、地震之間、為大波浪、多以被損云々、凡諸国有此如事、

同書中から、この地震が11月24日に発生したことがわかる。稻本紀昭氏も指摘するように、当時の

安濃津には、既に多くの家が立ち並んでいたことがわかる。しかし、今回の調査区からは、当時の遺構は明確には確認できず、わずかに灰釉陶器などが確認されたに過ぎない。古代の安濃津の実態は、依然として不明のままである。

c 中世の安濃津

都市化した以降の安濃津についても新たな問題が浮かび上がった。今回の調査でも、中世を通じて遺構・遺物が確認できるとは言えるものの、13・15世紀にその中心があることは明らかであり、14世紀代のものは今一つはっきりしなかった。これが、この調査区のみの傾向なのか、あるいは遺跡群全体を通していえることなのかは重要な問題である。

この問題は、安濃津の終焉に関する問題と絡めると、さらに大きくなる。安濃津は、15世紀末に発生した明応の大地震で壊滅的な打撃を受けたとされており、今回の調査でもそのことは裏付けることができる。しかし、この震災以降の18世紀の当地は、原則的に15世紀の地割を踏襲している。とくに、15世紀末段階まで機能していたと考えられる溝S D 170と18世紀の溝S D 143とは、ほぼ同じ位置に方位を同じくして設定されている。このことは、集落の景観そのものに限って見た場合、15世紀末と18世紀－すなわち中世と近世－との違い以上に、13世紀と15世紀－すなわち中世前期と後期－の違いの方が大きいといえるのである。歴史的画期としての14世紀をより一層評価する意義のあることを、この遺跡は示しているのである。

d 近世以降の安濃津

近世以降は、15世紀の地割りを踏襲するかたちで集落が形成されている。今回の調査では確認できなかったが、16～17世紀にかけての当地が、どのような景観を呈していたのかは追求しなければならない。そして、中世のあり方を問う意味からも、近世以降の遺構調査は極めて重要なのである。

e 埋蔵文化財として見た安濃津

最後に、埋蔵文化財としての安濃津について触れておく。今回の調査で確認したように、現在の生活面と中世のそれとでは、深い場所では1.3mほどの差がある。これは、市街化された当地とはいえ、遺跡の保存状態は決して悪くないことを示している。

今回の発掘調査は、破壊を前提とした記録保存であった。しかし、今後は、保存を前提とした調査を継続する必要がある。その際、砂質土壌を基盤とした安濃津遺跡群では、発掘調査を行えば、即、遺構崩壊へとつながることを忘れてはならない。単なる発掘調査ではない、何らかの方策が必要である。

安濃津は、15世紀末に震災を契機とした廃絶（規模縮小）が確認される場所であり、当時における町屋が良好に残されている遺跡である。15世紀末の段階における港町の景観復元についても、安濃津は全国的に強い発言力を持つ遺跡であることを認識して調査を進めていく必要がある。そのためには、今回の調査でも確認された、15世紀末段階と18世紀段階における地割の共通性にどのような背景が隠されているのかも、より一層追求しなければならない。

このことは、ほかの港・港町についてもいえるであろう。安濃津のみでなく、港町を検討するための文献史料は少ないが、その状況下における考古学的資料の重要性は、今回の調査成果を見ても明白である。ところが、伊勢湾西岸部の港・港町のなかで、遺跡として把握されている場所は数少ない。安濃津と同様、港町の考古学的調査を充実させていく必要がある。そのためには、地籍図などの調査を先行あるいは並行して進め、充分な保護対策を講じたうえでの調査が必要である。そして、今回の調査では充

分にできなかった近世以降の遺構調査も、中世以前を考えるうえで、非常に重要であることを、改めて指摘しておきたい。

3 おわりに

以上、不充分ながら、安濃津に関するいくつかの問題について検討を加えてきた。今回の調査によって、安濃津に関する情報がはじめて提示できたものと考える。

今後、伝説を脱却したより具体的な安濃津像が考察されることになると考えられる。最後にあたり、安濃津は、伊勢の中世史を構成するうえでのみ重要なわけではなく、東アジア史としての日本列島を考察するうえで重要であるという点にこそ、歴史的意義があると考える点を再度強調しておきたい。⁽⁶⁾

註

- 『耕雲紀行』（『大神宮叢書神宮参拝記大成』所収 神宮司庁 1976）
(2) 豊田武『中世の商人と交通』（豊田武著作集第3巻 1883）
ほか一連の研究。ほかに、脇田晴子『日本中世都市論』（東京大学出版会 1981）など
(3) 「神宮雑書」（『鎌倉遺文』 842）
(4) 「真継文書」嘉慶2月11月日付、藏人所縫写など（『中世鉄物師史料』名古屋大学文学部国士研究室編 法政大学出版局 1983 所収「中世文書」10～12号）
(5) 稲本紀昭『日本三津に関する史料の研究』（1989 津市）
(6) 第II・VI・VII章で触れたことについては、伊藤裕偉「中世の港湾都市・安濃津に関する覚書」（『ふびと』 49 1997）で述べたことを骨子としている。